

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる
～言葉と言葉や文と文のつながりを意識した対話を通して～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

今年度学校提案では、学びの質の高まりをめざす手立てとして「吟味を生み出す対話」をあげている。この学校提案を受けて、今年度国語科部では「言葉と言葉や文と文のつながりを意識した対話」を研究の中心としたいと考える。

これまででも、国語科の学習において、教材文の中の言葉や文に根拠を持って対話することを行ってきている。しかし、言葉や文に着目して考えていくだけでなく、それらのつながりを意識することでさらに「吟味を生み出す対話」ができるのではないだろうか。

例えば説明文では、各段落の言葉と言葉や文と文のつながりやその役割を考えることで、筆者の意図の解釈や内容・表現についての検討ができるであろう。

また、優れた文学作品では、解釈の手がかりとなる叙述は多様にある。心情の直接的な描写だけでなく、行動、情景、登場人物の相互関係などに着目すれば多様な解釈が可能である。

そして、多様に出された解釈の可能性を授業で出し合い、その適否を検討するすなわち吟味するという姿勢が国語科学習では重要であると考え。各段落や各場面での重要な言葉や文を解釈するだけでなく、教材全体のつながりを意識することにより「吟味を生み出す対話」につなげることができる可能性が生まれると考えるのである。

(2) 国語科でめざす子ども像

国語科の学習においては、話す・聞く、読む、書くの各分野の学習を通してつけたい力を明確にしていきたいと考えている。本校国語科部では、その力を「発想力」「論理力」「表現力」の3つとしている。

「発想力」については、友だちとの話し合いにおいて、他者の考えに触れることにより、いままでに考えつかなかった新しい考えを持てたり、文章を書く場合に他の文章や友だちの作品からヒントを得て自分の文章を違った視点から書き加えたりできる力と考える。

「論理力」については、教材を読んでいく際に、教材文の叙述を根拠として論理的に自分の解釈を作れたり、文章を書く際に、より伝わりやすい構成を考えたりすることができる力と考える。

「表現力」については、豊かな語彙を持ち、適切な表現を考えながら話したり、場面にあった適切な言葉を使いながら書いたりすることができる力と考える。

これらの力は、授業で取り上げる教材文だけではなく、読書指導を通して、豊かな読書経験を積むことによってもつけていきたいと考えている。「発想力」「論理力」「表現力」の3つの力は、日常生活における読書の際にも生きて働き、豊かな読書経験の中からも3つの力はつけることができるだろう。

そして、「発想力」「論理力」「表現力」の3つの力は国語科だけに止まらずすべての教科・領域での学びに生かすことができると考えるのである。

よって、国語科でめざす子ども像は、豊かな「発想力」「論理力」「表現力」を持ち、読書経験に生かせることができる子である。

そこで、本年度の研究テーマを『「発想力」「論理力」「表現力」を育てる ～言葉と言葉や文と文のつながりを意識した対話を通して～』とし、研究を進めることとした。

2. 国語科学習における「学びの質の高まり」

上記でも述べたように、言葉と言葉や文と文のつながりを意識した対話を行うことで、学びの質の高まりをめざしていく。

今年度、特に重視していくキーワードは「つながり」である。

文章を読んでいく際には、「言葉と言葉がどのようにつながっているのか」「文と文がどのようにつながっているのか」といったことを吟味することで学びの質は高まると考える。

また、例えば文学教材を読んでいく際には、同じシリーズの作品と読み比べたり、同じ作者の作品と比べたりすることにより教材文の内容理解や解釈がより高まると考える。

そして、自分の解釈と友だちの解釈のつながりを吟味することで、より教材を深く理解することができるだろう。

このように「つながり」を意識した学びを実践することにより学びの質は高められると考える。

3. 研究の展望

研究に対する取り組みを「対象」「他者」「自己」の3つの対話ごとに述べていきたい。

①対象との対話

国語科の学習では、教材文の叙述を手がかりにして、自分なりの解釈や考えを作っていく。その際には、言葉と別の言葉を関連づけたり、文と別の文を関連づけたりしながら対象との対話を行っていくことになる。そこで、「どの言葉や描写に着目し、別のどの言葉や描写とのつながりを考えることによって、どのような解釈ができるのか」を子どもたちが意識できるようにするためには、発達の段階に応じてどのような単元構成や授業展開が有効であるかを研究の対象としていく。

また、「教材作品のどの部分に着目し、他の作品と比べたり、読み広げたりすることによって、教材作品やテーマをより深く理解できるのか」ということも読書指導の観点から研究の対象としていく。

②他者との対話

「文章と友だちの意見とをつなげて自分の意見を更新する」「友だちと別の友だちの意見を聞き比べることにより自分の意見を更新する」といったことができるようにするために、どのような授業展開が有効であるかを研究対象としていく。また、他者との対話が成り立つためには、聞き手と話し手の間に情報をやりとりする必然性や目的が必要となる。それが生み出される課題設定の仕方についても研究の対象としていく。

③自己との対話

「自己の認識がどのように更新されたか」を実感できることが重要である。それが実感できるためには、どのように子どもたちが自己の学びを具体的に振り返りができるのかを研究対象としていく。

4. 研究の評価

学校提案の「学びの質の高まり」がどの程度達成できたかは、質を問題とするために、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限りくわしく記述することにより評価してきた。

「発想力」「論理力」「表現力」の高まりについては、発達段階や対象の持つ意味をふまえてつつ以下の観点を中心に評価してきた。

- ・「発想力」…他者との対話での双方向のやりとりの中で、新たな考えがどれだけ引き出せたか。対象との対話において課題に対して教材のつながりを根拠にどれだけ新たな視点を加えられたかなど。
- ・「表現力」…他者との対話において、友だちの発言に沿いつつ自分の考えを加えてどのように表現できているか。また、音読など表現活動の実際、書かれた文章に使われている言葉の使い回し、語彙の豊かさなど。
- ・「論理力」…対象との対話において、どれだけ教材のつながりを根拠に論を展開できているか。他者との対話において、教材と友だちの発言をつなげたり、友だちと友だちの発言をつなげて論を展開できているかなど。

また、評価については、実践を行った単元や授業を中心として行ってきた。単元やそれぞれの授業について、発言やノート・ワークシートへの記述内容などにより、学びの質の向上把握に努めた。

さらに、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて長期的な研究の成果と課題についても把握を行った。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士と比較によってである。

参考文献

安居總子（2002）『「伝え合い・学び合い」の時代へ』、東洋館出版

授業のユニバーサルデザイン研究会（2010）「授業のユニバーサルデザイン VOL. 1」、

東洋館出版

秋田喜代美 藤江康彦（2007）「はじめての質的研究法 教育・学習編」、東京図書